

優秀賞 [高校生の部]

シニア問題に対する自らの経験や気づきに基づいた問題意識を、「大学附属シルバーわくわくホーム」という具体的提案に展開した点が高く評価されました。

NPI学生小論文コンテスト2013
世界に向けて未来を提案しよう!
あなたが考える“わくわく社会”を
描いてください
入賞作品

わくわく高齢化



千葉県 私立 市川高等学校1年

松澤 優実 まつざわ ゆうみ

2007年、65歳以上の高齢人口が総人口に占める割合（高齢化率）が21%を超え、超高齢社会へ突入した日本。その後も高齢化率は上昇を続け、2012年には24.1%に上った。高齢化の影響が懸念されている。

具体的には、年金問題が挙げられる。高齢人口と15～64歳の生産年齢人口の比率を見てみると、1950年には1人の高齢者に対する生産年齢人口が12.1人であった。ところが、2012年には高齢者1人に対する生産年齢人口が2.6人になっている。このまま高齢化が進んで生産年齢人口の割合が低下すると、2060年には現役世代1.3人当たりで1人の高齢者を支える社会が訪れると予測され

ている。私が心配なのは、現役世代が高齢者を扶養する現在の日本の年金制度が崩壊するのではないかということだ。調査によると、老後の生計を支える手段として最も頼りにする収入源は、「公的年金による収入」の割合が最も多く64.3%だった。老後の生活費は年金で賄おうと考えている人が過半数を占めていることがわかる。もしも年金を十分に受給できなくなってしまった場合、このような人々は収入の当てがなくなってしまう。

懸念材料はまだある。介護職員の人材不足だ。高齢化に加えて、少子化の影響で介護職に就く若者が少なくなり、介護が必要な高齢者に対して十分な介護が行われていない

ようだ。加えて団塊の世代の高齢化に伴って、介護サービスの需要はますます増大していく。ところがある調査によると、現在でさえ介護事務所の53%が従業員の不足感を訴えているという。高齢者が安心安全で充実した生活を送ることができるよう、職員の不足は何としてでも解消したい。

これらの問題を解決するために何ができるのだろうか。

私は小学生の時に、地元の老人ホームを訪問した。私は訪問前、不安でいっぱいだった。ホームのお年寄りは元気な私の祖父母とは違う、という考えがあったからだ。車椅子が手放せないだろうし、耳も遠いだろう。そんなお年寄りを目の当たりにして、小学生の私たちができることは何もないと思っていた。だからホームに到着しても最初のうちは、笑顔が引きつってうまくしゃべることができなかった。見知らぬお年寄りとうまく接すればいいのかわからなかった。しかしその心配は杞憂だった。おじいちゃん・おばあちゃんは私たちに、まるで自分たちの孫のように接してくれた。自然と気持ちが明るくなって会話が弾み、折り紙やあやとり、お手玉をして楽しんだ。私たちの「ふるさと」の合唱を涙を流して聞いてくれたことが、とても嬉しかった。最後に、一人のおばあちゃんが「楽しかったね」と声をかけてくださり、私は来てよかったと心から思った。

老人ホームの職員の方の話によると、介護とは専門的な知識が必要なことだけではないのだという。体が不自由で思うように動けない人の代わりに物を運ぶ。楽しい話を聞かせてあげる。どんな小さなことでも立派な介護なのだそう。そして何よりも私が驚いたのは、老人ホームといっても元気なお年寄りが多いということだ。力仕事はできなくても、手先が器用なおばあちゃんがいる。特技を持ったおじいちゃんがいる。お年寄りはまだ社会で活躍できるのではないだろうか。

そこで私が提案するのが、「大学附属シルバーわくわくホーム」だ。大学系列の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学に加え、お年寄り向けの施設を設ける。このシルバーわくわくホームは普通の老人ホームとは違い、元気なお年寄りも、介護が必要なお年寄りも入ることができる。また経営元が同じであるため、幼稚園や学校と合同の活動を企画しやすい。幅広い年齢層との交流ができるようになり、様々なメリットが生まれる。そのメリットを2つ挙げる。

1つ目は、年金制度の維持である。これからの時代、歳をとってからもそれぞれの健康状態や労働意欲に応じて誰もが仕事を続けていけるような体制が必要だと思うのだ。そうすれば、高齢者が年金に頼ることなく生活できるようになり、年金の給付額が減額されてもそれほど家計に影響はない。こうして

年金制度の崩壊は免れる。現に元気な高齢者に働く意思はある。団塊の世代対象の調査で、何歳まで働きたいか就労希望年齢を見ると、「働けるうちはいつまでも」が最も多く25.1%であった。働きたいと思っている人が年齢を理由に仕事を手放さざるを得ないのは惜しい。そこで、学校・幼稚園の清掃や、校庭・園庭の木々の剪定、給食調理など、ひとりひとりに合わせた仕事を提供するのだ。仕事は他にもある。放課後の見回りパトロールや小学校の学童保育。シルバーわくわくホームが窓口となることで、高齢者は学校や幼稚園から職を手にすることができるというわけだ。

2つ目のメリットは、介護職員の不足を補うこと。附属の高校生や大学生のボランティアが介護の担い手となるのだ。もちろん私たちには介護福祉士の資格はないし、時には足手まといになるかもしれない。でも、将来を考えるとそんなことは言っていられない。2060年には、国民の約2.5人に1人が65歳以上の高齢者となることが予測されているのだ。街で見かけるお年寄りの数は今よりずっと増える。だから、介護に携わる人のみではなく、国民全体で高齢者を支えたい。その第一歩として、学生が不慣れながらも介護をする。簡単なお手伝いでも介護なのだ。高齢者介護の授業を取り入れたり、大学は単位に組み込んだりする。私はこの制度によって、若者にボランティア精神が根付くことを望

む。また、ボランティアをするうちに介護職員の必要性を感じて介護福祉士を志す若者が増えることも期待できる。私たちはもっと、お年寄りを支えるのは自分たちなのだという意識を持つべきだと思う。

またこのような体験は、高齢者にとっても私たち学生にとっても意味のあるものになると考える。高齢者は若者から笑顔と元気をもらうだろう。私が訪問した老人ホームのおばあちゃんがこう言っていた。

「元気なあなたたちを見ていたら、一人で歩けるような気がしてきたわ」

お年寄りの子供の元気な姿を見ると気持ちが若返り、何事にも積極的にになれるのだと職員の方が話してくれた。自分の子供時代を思い出したり、その思い出を懐かしそうに語ってくれることもあるそうだ。

そして私たちは、お年寄りからたくさん大切なものを得ることができる。私は幼い頃から祖父母に戦争の話聞いてきた。私たちの経験していない戦争の歴史は、大変貴重なものだ。同時にこれからは私たちが伝えていかなければならない責務を負っている。次の世代に語り聞かせてゆくには、体験者から直接話を聞くことが一番大切だ。そして昔から受け継がれてきた伝統がある。茶道や武道などの他にも、浴衣の着付けや礼儀など、お年寄りから教わりたいことがたくさんある。

私は将来、このような大学附属のシルバー

ホームをつくりたい。退職後に誰でも気兼ねなく入れる学校のような存在だ。

高齢化と聞くと、年々年老いて体力がなくなっていく暗いイメージを抱くかもしれない。しかし、これからの高齢化は違う。世代を超えて支え合い、学び合う、わくわく高齢化だ。

2060年、私は63歳。人口の40%が65歳以上という社会の中で、まだ現役で活躍しているだろうか。

参考文献

- ・ 内閣府「平成25年版 高齢社会白書」
- ・ 金融広報中央委員会「知るぽると」
<https://www.saveinfo.or.jp/finance/kinyu/yogo/yogo407.html>
- ・ 読売ISマーケティング情報誌「perigee」第16号、「経済、最初の一步」
<http://www.yomiuri-is.co.jp/perigee/economy10.html>
- ・ 読売新聞の医療サイト「yomiDr.」
<http://www.yomidr.yomiuri.co.jp/page.jsp?id=71079>